

中国残留日本人孤児から学んだこと（第10回）

## ボランティア・市民運動の歴史と反省：1972～1980年

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（兵庫県版）』

2019年7月号掲載記事に若干加筆しました。

残留孤児が歩んできた人生を振り返ると、そこには数々の日本人ボランティア・市民運動が、「良くも悪くも」何らかの役割を果たしてきた。かくいう私も、微力ながら支援活動に携わるボランティアの一人だ。

善意のボランティアの諸先輩が果たしてきた役割を「良くも悪くも」などというのは、失礼かもしれない。しかし、諸先輩が達成してきた偉大な成果とともに、その歴史的制約・限界をきちんと見据えておくことは、今後のボランティアの発展のためにも、我が身を反省するためにも、必要だろう。

さて、残留孤児をめぐる日本のボランティア・市民運動の歴史は、大きく3つの時期に区分される。

第1期は、日中国交が正常化した1972年から1980年頃までだ。

今回は、この第1期のボランティアについて考えよう。

当時のボランティアの主な担い手は、敗戦直後に中国から日本に帰還した引揚者だった。その中には、中国に我が子を残して引き揚げてきた親達も少なくなかった。そこでこうしたボランティアは、まずは中国にいる残留孤児の情報を収集し、それを手掛かりに日本に住む肉親を捜し出して再会させ、そして肉親が判明した孤児の日本への帰国を支援する活動に取り組んだ。

こうしたボランティア活動は、二つの点で日本社会を大きく変えた。

まず一つは、残留孤児問題が未解決の問題だという事実を、日本社会に再認識させたことだ。1958年、日本政府は中国からの引揚事業を打ち切り、翌年から中国残留者の「戦時死亡宣告」を促進した。中国に取り残された残留孤児は「死者」と見なされ、行政的に措置されていった。また日本各地に満州開拓団や引揚の記念碑が建立され、それらが「忘れてはならない歴史／記憶」とされると同時に、実際には中国で生きている残留孤児はその「歴史／記憶」に埋め込まれた。つまり「忘れてはならない過去の歴史」の名のもと、生きている残留孤児の存在は忘れられていったのである。残留孤児の肉親捜しのボランティアは、こうした日本社会の風潮に一石を投じた。残留孤児は決して過去の

歴史・記憶ではない。今、ここでの解決を必要としている現在進行中の問題だ。ボランティアは、この事実を日本社会に突き付けた。

いま一つは、日本政府に、肉親捜しの訪日調査を実施させたことだ。日本政府は、残留孤児の肉親捜しを個別家族の「私事」とみなし、公的責任を認めず、調査を実施しようとしなかった。これに対し、ボランティアは残留孤児の発生が政府の政策に起因すると主張して世論を喚起し、ついに1981年に日本政府に肉親捜しの訪日調査を実施させたのである。

以上のように、ボランティアが果たした役割は、極めて大きい。

ただしその一方、当時のボランティアには、歴史的制約もあった。

すなわちまず、残留孤児の肉親捜しにおいて、ボランティアが果たした役割は、実際には必ずしも大きくない。なぜなら肉親の記憶・情報が豊富な年長の残留孤児（日本敗戦時、5～6歳以上）は、ボランティアの手を借りるまでもなく、自力で肉親との再会を果たした。ボランティアに協力を求めたのは、主に肉親の記憶・情報が乏しい年少の残留孤児の、しかもそのごく一部にすぎない。そしてそのほとんどは、肉親判明に至らなかった。今日、当時のボランティアを主人公とする映画・ドラマが時折、制作される。もちろんそれらは、残留孤児問題への社会的関心・理解を広げる上で有意義だ。しかし、それらが当時のボランティアを賛美するあまり、肉親捜しの最大の主体・主人公が実はボランティアではなく、残留孤児自身だったこと、大多数の年少の残留孤児の身元は今なお未判明のまま放置されていること等の事実を覆い隠してしまうとすれば、それは問題である。

それとも関わってもう一点、当時のボランティアが最も重視していたことは「私的な肉親捜し」であり、「残留孤児・日本人としての公的な認定」ではなかった。1981年に実施された訪日調査も、あくまで「肉親捜し」を目的とする。そのため、肉親に繋がる情報・証拠がなければ、残留孤児は訪日調査に容易に参加できなかった。10年以上にわたって訪日調査への参加を申請し続けたが、許可されなかった孤児もいる。日本に住む日本人から見れば、「まずは肉親捜し・肉親との再会。肉親が判明した孤児から順番に帰国許可」というのは、ごく当然の手順であったかもしれない。しかし、そうした「肉親判明＝血統・戸籍の確認」こそが「真の日本人としての確証」であり、日本定住の必要条件だとする血統主義の考え方が、年少の残留孤児の認定や永住帰国を大幅に遅延させたことは間違いない。年少の残留孤児は語る。「0歳で道端に置き去りにされていた私に、『肉親に繋がる情報を出せ』というのはあまりに理不尽だ」、「まず最初に『置き去りにされた日本人、つまり残留孤児』と認定し、その後、肉親の情報が豊かな日本

に長期滞在・定住させて継続的に肉親を捜すべきだ」。

善意に溢れたボランティア活動が、時として過大評価され、当事者の主体的努力の過小評価につながることもある。意図せざる結果として、当事者の苦難を助長することすらある。

私達、現在のボランティアは、これらの問題をどのように受けとめ、日々の支援活動に生かしていくべきなのだろう。